

114  
A 1941

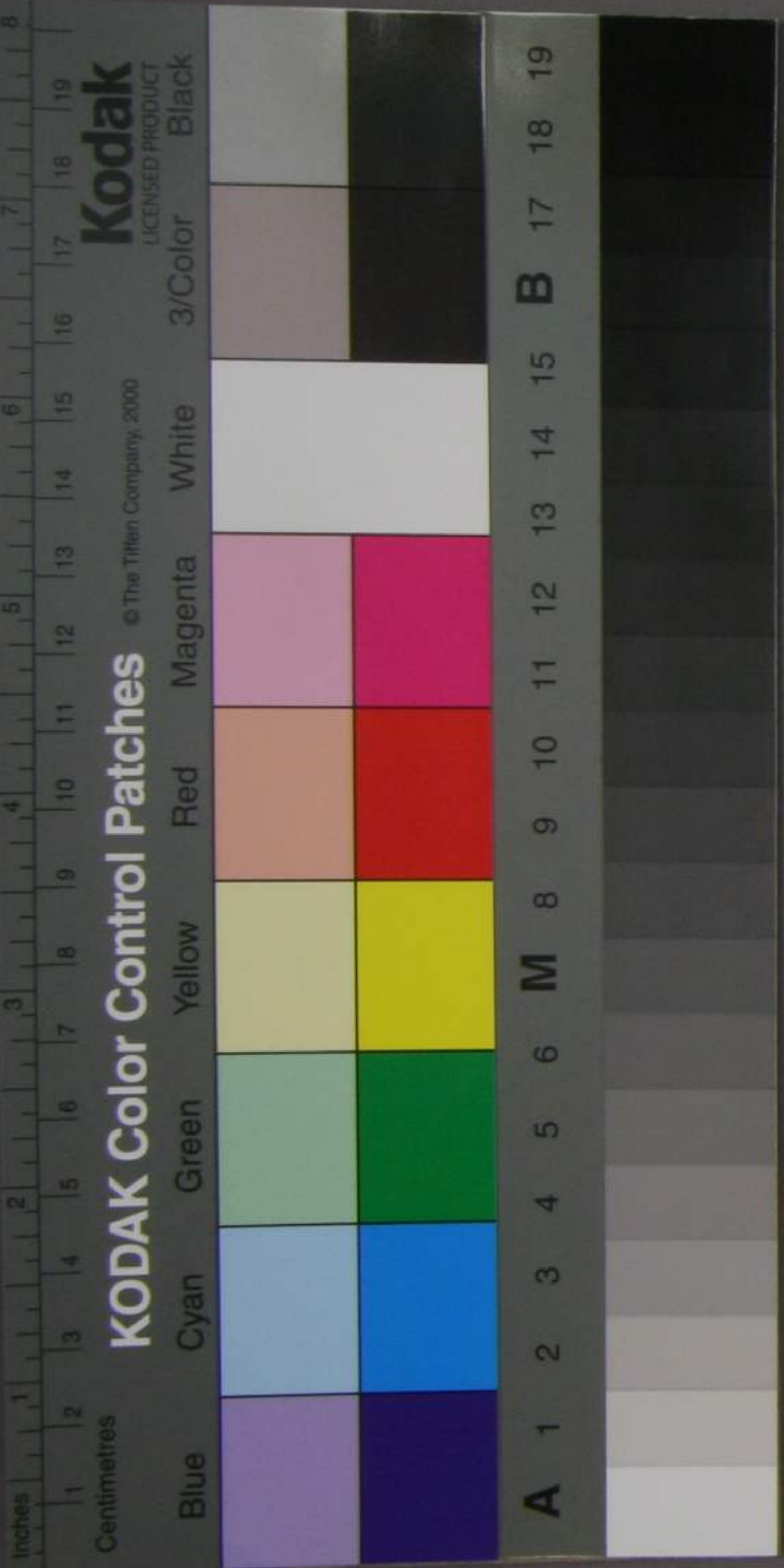


官房  
秘  
八三七号

明治三十二年 度以後ノ歳計ニ於テハ  
入ノ増加ヲ必要トスルヲ以テ之カ  
財源ヲ調査シ別紙ニ記載スル税目  
及專賣收入ヲ選擇シタリ然レトモ此等  
ノ財源ニ依テ歳入ノ増加ヲ謀ルニハ之ニ  
伴ヒ諸種ノ施設ヲ為サルヘカラサルカ  
故ニ豫メ閣議ニ於テ大体ノ決定ヲ得  
然ル後法律案其ノ他ノ取調ニ從事ス  
ルヲ便宜ト認メ茲ニ之ヲ閣議ニ提出

大正十一年四月贈  
大隈侯爵郵寄

2338



ス

明治三十一年七月十八日

大藏大臣松田正久



内閣總理大臣伯爵大隈重信殿

第一市街宅地稅

增收見積額 貳百八拾六萬八千二百叁拾參圓

課稅方法

市街地ノ宅地ニハ收益十分ノ一半ノ割合ヲ以テ

市街宅地稅ヲ課ス

市街宅地ノ收益ハ一ケ年ノ賃貸價格ヨリ保

存費公課トシテ其ノ十分ノ二ヲ控除シタ

ルモノヲ以テ其ノ收益トス

賃貸價格ハ評定委員ヲ設ケテ之ヲ評

定セシム

賃貸價格ハ十個年毎々其評定ヲ更

新ス

現今ノ郡村宅地中市街宅地ト為スラ必  
要トスルモノハ命令ヲ以テ之ヲ指定ス  
市街宅地ニハ地租ヲ課セス

此法律ハ明治三十二年一月一日ヨリ施行ス  
計美

現在市街宅地坪数 六二、三五五、二二五坪  
此借貸價格 三〇、六七八、七七〇円

但借貸價格一坪平均四拾九錢貳厘ト看做ス  
借貸價格中十分ノ二

減シタルモノ 二四、五四三、〇一六円  
此稅額 三、六八一、四五二円

現在市街宅地租 八一三、八一八円  
差引

増額

二、八六八、六三三円

注意

右ノ方法ヲ實行スルトキハ市街宅地ヲ有ス  
ル者ノ負擔ハ現在ニ比シ平均四倍半ト  
ナルカ故ニ場所ニ依リテハ二十倍又ハ三十倍  
トナルモノアルヘシ  
法律ノカラ既往ニ溯ラシムルコトナクシテ明  
治三十二年一月一日ヨリ法律ヲ施行スルニハ  
本年中之法律ノ發布ヲ要ス  
本年中之法律ヲ發布スルモ施行ノ準  
備整理セサルカ故ニ明治三十二年ニ限テハ  
第一期ノ納期ヲ遅クセサルヘカラス  
市街宅地ノ借貸價格ヲ評定シ其ノ基

帳ヲ調製セサルヘカウサルカ故ニ施行初年ニ  
於テ徵稅費凡ソ拾萬圓ヲ要シ十年目  
毎々凡ソ之ト同額ノ徵稅費ヲ要スヘシ

## 第二所得稅

增收見積額百八拾萬六千四拾六圓

### 課稅方法

帝國ニ住所又ハ居所ヲ有スル者ハ内外人  
ヲ問ハス一年ノ所得金額貳百圓以上ナルト  
キハ所得稅ヲ課ス

所得稅ハ所得ノ種類ニ依テ其稅率ヲ異  
ニス所得ノ種類及其稅率左ノ如シ

第一種 法人ノ所得 千分ノ三十

第二種 帝國ニ於ケル公債社債ノ利子

及帝國内ニ本店ヲ有スル法人ヨリ受クル配

當金 千分ノ二十五

第三種 官廳又ハ公共團体ヨリ受クル俸給

結料 手當金 歳費 恩給 年金 其ノ他ノ之  
期金

第四種 前各種ニ屬セサル所得

三十万円以上	千分ノ六十
十万円以上	千分ノ五十五
五万円以上	千分ノ五十
三万円以上	千分ノ四十五
二万円以上	千分ノ四十
一万五千元以上	千分ノ三十五
一万元以上	千分ノ三十
五千元以上	千分ノ二十五
二千元以上	千分ノ二十
千円以上	千分ノ十五

五百円以上

千分ノ十二

三百円以上

千分ノ十

二百円以上

千分ノ八

第一種ノ所得税ハ決算ノ都度其ノ計

算ニ依テ之ヲ徴収ス

第二種及第三種ノ所得税ハ支拂ノ都度

支拂者之ヲ徴収シテ政府ニ納ムモノトス

第四種ノ所得税ハ年額ノ二分シ其ノ年九

月及翌年三月之ヲ徴収ス

法人ノ所得ハ純益金中ヨリ配當ニ充ツキ

金額及法定積立金最少額ヲ控除シタルモノトス

第二種及第三種ノ所得アル者ハ他ノ所得ト合

シテ二百円ニ達セサルコトヲ証明スルニアラサレハ所

得額ノ多クハ拘ハラズ所得税ヲ課ス  
 帝國ニ本店ヲ有スル法人ハ其法人ナルコトヲ  
 証明スルトキハ第一種ノ所得税ヲ課セス  
 第四種ノ所得ノミハ税務署長下調書ヲ作り  
 テ之ヲ調査委員會ノ調査ニ付シテ決定ス  
 所得届出ハ之ヲ廢シ下調ハ全ク税務署長ノ  
 認定ニ任ス但税務署長ハ必要ト認ムルトキハ  
 届出ヲ為サシムルコトヲ得  
 調査委員ノ選舉會議方法等ハ畧々現行  
 法ニ同シ  
 北海道ニモ所得税法ヲ施行ス  
 此ノ法律ハ明治三十二年一月一日ヨリ施行ス  
 計筆

第一種ノ税額	二八、七九七円
第二種ノ税額	一、三五八、七三〇
第三種ノ税額	一、四九、七六八
第四種ノ税額	六〇、〇〇〇
三十万円以上	一、三二、〇〇〇
十万円以上	一、〇五、〇〇〇
五万円以上	二、三六、八〇〇
三万円以上	三、一〇、五、六〇〇
二万円以上	一、〇〇、八〇〇
一万五千元以上	一、一五、二〇〇
一万元以上	三、〇〇、〇〇〇
五千元以上	三、〇〇、〇〇〇
二千元以上	三、七四、〇〇〇

千円以上	二七〇、〇〇〇
五百円以上	二〇一、六〇〇
三百円以上	一五五、一九四
二百円以上	三〇九、〇七三

合計

明治三十年決議額

差引

増額

注意

一、八〇、六、〇、四六

課税ノ範圍シ二百圓ニマテ擴張スルコトハ財源ノ必要ニ依ルト雖トモ小所得者ノ不平シ免レス且ツ場所ニ依リテハ地方ノ財源ヲ國庫ニ奪フコトナルナキヲ保セス

前記課税方法、依ラ所得税ヲ徴収スルトキハ幾分人民ノ煩勞シ者クテ得ルト同時ニ官廳ノ調査ヲ要スル事項増加スルカ故ニ所得ノ下調係等ヲ置クノ必要アリ且ニ是來地方税支辨ニ屬シタル經費ノ徴税費、移ルモノアルヲ以テ徴税費凡ソ十萬圓ヲ増加スルヲ要ス





度以上、五

酒類製造

數ヲ設ケル

雖ニ制限

此ノ法律ハ

明治二十七年

高左ノ如シ

清酒

白酒

味淋

濁酒

焼酎

計皆

三九、四五七

四七、〇一八

六三、四二五

*[Faint handwritten notes in the right margin, possibly bleed-through from the reverse side.]*

混成酒

計

四、三九〇、五一〇

増税ノ為メ造石高ハ徳ヲ二割ヲ減ズルモ混成

酒ノ取締ヲ嚴シク爲メ清酒濁酒焼酎ハ

五分ヲ増加シ尚ホ自家用酒ノ特典ヲ廢スル

為メ清酒八万四千七百六十四石濁酒十万五千

九百五十五石焼酎二万九千九百九十一石ヲ増加

スルモノト假定スルトキハ増税後ノ酒類造石

數ハ凡ソ左ノ如クナルニ

清酒 三、六七六、六八〇石

白酒 一、九七七

味淋 三、一五六五

濁酒 一、四九、九二一

度以上の五度ヲ増ス毎ニ税金十圓ヲ加フ  
 酒類製造ノ免許ヲ與フルニハ一定ノ制限石  
 數ヲ設ケ制限石數ヲ製造セザルトキト  
 雖モ制限石數ノ税ヲ課ス  
 此ノ法律ハ明治三十二年十月一日施行ス

計算

明治二十七年以降三箇年平均酒造造石  
 高左ノ如ク(但混成酒ハ明治三十年ノ造石高ナリ)  
 清酒 四、二五五、七八三石  
 白酒 二、四七一  
 味淋 三九、四五七  
 濁酒 四七、〇一八  
 焼酎 六三、四二五

改正法律  
 シモ八周知  
 ヲ立テシメ  
 酒類ハ物  
 貯蔵酒ノ  
 利益ヲ受  
 所ナルヘシ

混成酒

計

四、三九〇、五一〇

増税ノ爲メ造石高ハ總テ二割ヲ減ルニモ混成  
 酒ノ取締ヲ嚴シク爲メ清酒濁酒焼酎ハ  
 五分ヲ増加シ尚ホ自家用酒ノ特典ヲ廢スル  
 爲メ清酒八万四千七百六十四石濁酒十万五千  
 九百五十五石焼酎二万九千九百九十一石ヲ増加  
 スルモノト假定スルトキハ増税後ノ酒類造石  
 數ハ凡ソ左ノ如クナルヘシ

清酒 三、六七六、六八〇石  
 白酒 一、九七七  
 味淋 三一、五六五  
 濁酒 一四五、九二一

毎々税金十圓ヲ加フ  
ラ興フルニハ一定ノ制限石  
數ヲ製造セザルトキト  
税ヲ課ス

十二年十月一日ヨリ施行ス

三箇年平均酒造造石

明治三十年ノ造石高ナリ

四、二五五、七八三石

二、四七一

三九、四五七

四七、〇一八

六三、四二五

三、一四三、三五四  
四、三九〇、五一〇

總テ二割ヲ減ルニ混成

酒為ノ清濁酒焼酎ハ

家用酒ノ特典ヲ廢スル

七百六十四石濁酒十万五千

二万千九百九十一石增加

トキハ増税後ノ酒類造石

三、六七六、六八〇石

一、九七七

三一、五六五

一四五、九二一

改正法律ノ施行期日ヲ明治三十二年十月一日ト  
シテハ周知ノ期間ヲ長クシ製造者ヲシテ十分ノ計畫  
ヲ立テシメニガ為メナリ然レモ若シ明治三十二年一月日  
ヨリ改正法律ヲ施行シ同日以後ニ査定ヲ受クル  
酒類ハ惣テ改正税率ヲ適用スルコトニセハ明治  
三十二年度ニ於テ千三四万圓ノ增收ヲ得ベシ而シテ  
貯蔵酒ノ多量ヲ有ス酒造家ハ酒價ノ騰貴ニ依リ  
利益ヲ受クヘキ故ニ改正法ノ施行ノ早キハ其望ム  
所ナルヘシ

燒酎  
混成酒

七五、一〇二  
九、八八三

計

此稅額

三、九四一、一三一石  
五九、〇三四、二九六円

今現行法ニ依ル稅額ヲ見ルニ左ノ如シ

明治二十七年以後三箇年平均酒造稅額

三〇、八七三、八五二円

明治三十年年度自家用酒稅額

六七四、一五〇円

明治三十年混成酒稅額

七四、一二七円

計

法律改正ノ前後ニ依リ其收入額ヲ差引ス

三、六二二、一三〇

ルトキハ 増額左ノ如シ

二七、四一二、一六六円

注意

酒造稅法ヲ改正シテ前記ノ增收額ヲ得ムト

セハ凡ソ左ノ事項ヲ併セ行ハサルヘカラス

一自家用酒ノ特許ヲ廢止スルコト

二酒類ヲ製造セザル者ノ製造ニ係ル酒母膠

ニ相當課稅スルコト

三麦酒葡萄酒ニ相當課稅スルコト

四酒精ヲ政府ノ專賣ト為スコト

五酒類ニ関スル海關稅ヲ内國稅ト同一ノ

割合及方法ヲ以テ徵收スルコト及酒精ヲ

右五項ノ中 海關稅ヲ增加スルコト及酒精ヲ

專賣ト為スコトニ就テハ事外國人ニ関ス  
ルカ故ニ國際ノ文涉問題ヲ惹起スルナキ  
ヲ保セサルヲ以テ最モ考慮ヲ要ス  
酒類税法ノ改正并ニ之ニ伴テ施設スヘキ  
事項ヲ行フ為メニハ徵稅費ノ増加ヲ要ス  
ルモノ左ノ如シ

一酒類稅酒母醪稅麥酒稅葡萄酒稅ニ  
関シテハ 凡ツ三十萬圓

二酒精專賣ニ関シテハ 凡ツ七十五萬圓

創設費 凡ツ百五十萬圓

專賣資金 凡ツ四十五萬圓

酒精取扱費 凡ツ四十五萬圓

沖繩縣ニ回慣ニ依ル租稅制度ノ整理セラル、  
マテハ酒類稅法ヲ施行セズ但沖繩縣ニ於テ  
製造ニ名酒類ヲ他ノ地方ニ輸出スルトキハ内  
地酒類稅ニ比準ニ名出港稅ヲ課スルモノ  
トス  
伊豆七島小笠原島及基隆灣ニハ酒類稅法ヲ  
施行セズ此等ノ地方ニ於テ製造スル酒類ハ  
内地ニ移入スルコトヲ禁ズルモノトス

第四 賣藥印紙稅

增收見積額 百四十七万八千六百七十二圓

課稅方法

現行稅率ヲ改メ賣藥定價一錢ニテ每ニ  
三厘ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ

此ノ法律ハ明治三十二年一月一日ヨリ施行ス

計算

改正案ハ現行法ニ比シ稅率ノ畧々三倍ニ相  
當スルヲ以テ明治三十年年度賣藥印紙  
稅豫算額 七十三万九千三百三十六圓ヲ三倍  
スルトキハ二百二十万八千八百トナリ現在稅  
額ニ比シ百四十七万八千六百七十二圓ノ増額  
トナルナリ

Blank lined page with faint bleed-through text from the reverse side.

注意

明治三十二年一月一日より改正賣葉印紙税法ヲ施行スルニ本年年中ニ法律ノ普及ヲ要ス  
税率増加ノ為メ徵稅費凡ソ二万円ノ増加ヲ要ス

明治三十二年一月一日より改正賣葉印紙税法ヲ施行スルニ本年年中ニ法律ノ普及ヲ要ス  
税率増加ノ為メ徵稅費凡ソ二万円ノ増加ヲ要ス

第五 砂糖税

増収見積額

五百三十三万七千八百九十九円

内

内國税

五十万五千七百七十六円

海關税

四百八十三万二千百二十三円

課稅方法

砂糖ヲ製造スル者ハ製造場一個毎

ニ政府ノ免許ヲ受クルヲ要ス

砂糖ハ其色相ニ隨テ税率ヲ異ニス

砂糖ノ色相ヲ判別スルハ和蘭標本ニ依

ル

砂糖税率左ノ如シ

一和蘭標本七号以下 百斤付金六十銭





数左ノ如シ

和蘭標本八号以上十五号以下

赤砂糖

一二四、二六二、六三〇斤

和蘭標本十五号以上二十号以下

白砂糖

五〇、二九〇、九八六

和蘭標本二十号ヲ超ラズモノ

白砂糖

一四六、〇三三、六〇九

精製砂糖

二〇七、九六四

氷砂糖

六九〇、七二八

糖蜜

九、九五六、三一九

糖水

九、〇四六

右ノ斤数ヲ基礎トシ改正税率ヲ適用スル

トキハ左ノ如シ

内國稅

五〇五、七七六円

海關稅

五、四六一、七一六

計

五、九六七、四九二

外

明治三十年砂糖輸入額

六二九、五九三

差引

増額

五、三三七、八九九

注意

精糖ハ日英條約ニ於テ是價一割ノ恒定稅率ト爲シ唯内國稅ヲ増課スルトキ其程度マテ海關稅ヲ増加スルコトヲ約シタルモノナリ而シテ砂糖ノ輸入者ハ英人獨人ヲ最モ多シト爲スカ故ニ今是價三割ヲ標準トシテ

度量税ヲ課スルトキハ英獨二國ハ勿論其  
他ノ条約國ト雖ハ頗ル注意ヲ以テ新税賦  
課ヲ視ルヘシ

日英条約ニ於テハ内國税ヲ課スル程度マテ  
ハ海關税ヲ増加スルヲ得ルコトヲ議定書  
ヲ以テ定メタリト雖ハ日獨ノ間ニハ明カニ此  
ノ如キ議定ヲ為サス故ニ条約ノ解釋  
トシテハ精糖ハ日獨条約議定書ノ効力  
ニヨリ泛價一割以上ノ海關税ヲ課スル能ハス  
ト謂フコトヲ得ヘシ若シ此解釋ヲ是ナリトセバ砂  
糖税ヲ起スコトヲ斷念セザンヘカラス  
関稅定率法ニ於テ精製糖ノ税率ヲ二割トシ  
粗製糖ノ税率ヲ五分トシタルハ粗製品ノ輸入税

ヲ輕クシテ内國製造業ニ資セントスルニ在リシナルヘシ然  
ルニ今之ニ泛價二割ノ標準トシタル度量税ヲ課  
スルコトハ頗ル劇變ナリト謂ハサレヘカラス

沖繩縣ニ於ケル砂糖買上ノ旧慣ハ砂糖

稅制定ト共ニ之ヲ廢止セザルヘカラス

臺灣ニ於テモ内地ト同一ナル砂糖稅ヲ

制定スルヲ要ス

臺灣砂糖ヲ香港ニ送テ精製シ之ヲ

内地ニ輸入スル場合ハ臺灣ヲ輸出スル時

ニ戻稅ヲ為シ内地ニ輸入スル時之ヲ輸入

砂糖トシテ課稅スルヲ要ス

前記計算ニ現ハシタル内地砂糖製造高

ハ自家用ヲ包含スヘキ力故ニ實際ノ

税額ハ之ヲ減スヘシ  
砂糖、製造ハ内地ニ於テハ利益甚ク夥シ  
故ニ砂糖税ヲ課スルトキハ其檢束ニ勝  
ハスシテ廢業スル者ヲ生スヘク内地砂糖  
製造業、衰微スルナキヲ保シ難シ  
新ニ砂糖税ヲ制定スルトキハ内國稅  
徵收費ニ於テ凡ソ七万圓ヲ要ス

第六 葉烟草專賣收入

增收見積額 九百八十八万千八百八十五圓

增收方法

現行葉烟草收入率ニ倍ナルヲ三倍ニ改メ外  
國葉烟草ハ政府自ラ之ヲ輸入シ同一收入  
率ヲ以テ賣下クルモノトス  
外國産葉烟草ハ政府ノ外輸入スルヲ禁ス  
外國ヨリ輸入スル製造烟草ノ輸入稅率  
ヲ十割ト為スモノトス  
明治三十三年度ヨリ實施スルモノトス

計算

收入

内國産葉烟草專賣益金 一五、五二〇、三七〇圓

外國產葉煙草專賣益金

二、一七六、〇〇〇、〇〇

計

一七、六九六、三七〇

支出

葉煙草取扱費

一、三〇〇、〇〇〇

建築費四百二十一萬圓、利子年五分

二一〇、五〇〇

內國產葉煙草資金五百萬圓、利子年五分

二五〇、〇〇〇

外國產葉煙草資金五十萬圓、利子年五分

二五、〇〇〇

計

一、七八五、五〇〇

差引

一五、九一〇、八七〇

純益

内

現行收入率ニ依ル純益

六、〇二九、六八五

ヲ控除スルトキハ

増收入額

九、八八一、一八五

注意

葉煙草專賣收入率ノ増加ハ法律ヲ要セス  
 ト雖モ之ニ伴ヒ施設スヘキ私人ノ外國產  
 葉煙草輸入ヲ禁スルコト及外國產製造煙  
 草ノ輸入税増加ノコトハ法律ノ制定ヲ要  
 ス  
 政府ニ於テ外國產葉煙草ノ輸入ヲ為ストキ  
 ハ專賣所ノ事務増加スルヲ以テ經費三万  
 圓ノ増加ヲ要ス

以上ノ財源ニ依リ國庫ノ收入ヲ増加スルト  
同時ニ一方ニ於テハ現行國稅ノ整理ヲ爲シ  
以テ租稅制度ノ完良ヲ謀ルヲ必要ト認  
ムルヲ以テ左記各稅ニ關スル法律ノ改正  
又ハ廢止案ハ前記收入ノ增加案ト共ニ之  
ヲ第十三議會ニ提出スルモノトス

第一 證券印稅

現行法ヲ改正シ稅率ヲ簡明ニシ、手形  
用紙ヲ廢止、爲替手形約束手形ノ印  
紙稅ヲ輕減シ、小切手ヲ無稅トスル等  
現今經濟社會ノ狀態ニ適應スルノ  
改正ヲ爲スモノトス  
改正法律ハ明治三十二年四月一日ヲ施行ス

ルモノトス  
此改正ニ依り収入ノ減スルコト凡ツ三万二千  
百五十四圓ナリ

### 第二 登録税

民法商法不動産登記法等ノ制定ニ  
依り官簿ニ登録スルキ事項ノ増加ニ  
伴ヒ之ニ對スル登録税ヲ設クルモノトス  
改正法律ハ不動産登記法ノ施行期日  
ヨリ施行スルモノトス  
此改正ニ依り収入ノ増加スルコト凡ツ三十二万  
六千九百四十四圓ナリ

### 第三 北海道水産税

水産業ハ北海道ニ於ケル富源ノ一ニシテ  
其ノ發達ヲ奨励スルノ必要アルノミナラス  
現行税法ハ課税方法煩雜ニシテ水産  
業者ニ不便ヲ與フル勢カラサルヲ以テ之  
ヲ廢止スルモノトス  
此ノ法律ハ明治三十三年一月一日ヨリ施  
行スルモノトス  
此ノ廢止ニ依り収入ノ減スルコト凡ツ三十分  
三千五百四十三圓ナリ

### 第四 北海道地方税

北海道地方税ハ名ハ地方税ナリト雖モ

國庫ニ納入スルモノナルカ故ニ全ク國稅、  
一タリ而シテ課稅ハ滯納者多キカ故ニ徵  
稅費ヲ要ス多キ割合ニハ其ノ收入頗ル  
少シ寧ろ口之ヲ廢止シ他日北海道ニ於  
ケル地方制度、制定セラレタル時之ヲ地  
方ノ一財源ト爲サシムルヲ可トス  
此ノ法律ハ明治三十二年四月一日より施行  
スルモノトス  
此ノ廢止ニ依リ收入ノ減スルコト凡ソ七萬五  
千五百九十九圓ナリ

第五 輸出稅

外國輸出品ノ海關稅ヲ全廢シテ外國

貿易ノ隆盛ヲ謀ルハ目下ノ急務ナリトス  
故ニ明治三十三年四月一日よりハ輸出稅ハ  
總テ之ヲ廢止スルモノトス  
此ノ廢止ニ依リ收入ノ減スルコト凡ソ二百二十  
六萬九千七百七十八圓ナリ

明治三十二年四月一日より、  
 明治三十三年三月三十一日まで、  
 本市の歳入歳出の概況を、  
 以下の通り記述する。

上表記述を所依り、今後、歳入増加ヲ  
 計算スルトキハ左ノ如シ

明治三十二年 度

増加スルキモ、

市街宅地税	二、八六八、六三三
所得税	一、八〇六、〇四六
賣藥印紙税	一、四七八、六七二
登録税	三二六、九四四
計	六、四八〇、二九五
減却スルキモ、	
證券印紙税	三一、二五四
北海道地方税	七五、五九九
計	一〇六、八五三



差引増額

六、三七三、四四二

明治三十三年度以降

増加ス（キ元ノ）

市街宅地稅

二、八六八、六三三圓

所得稅

一、八〇六、〇四六

酒類稅

二七、四一三、一六六

賣藥印紙稅

一、四七八、六七二

砂糖稅

五、三三七、八九九

登録稅

三二六、九四四

葉烟草專賣收入

九、八八一、一八九

計

四九、一一一、五四五

減却ス（キ元ノ）

證券印稅

三一、二五四

北海道水產稅

三〇、三、五四三

北海道地方稅

七五、五九九

輸出稅

二、二六九、七七八

計

二、六八〇、一七四

差引増額

四六、四三一、三七一

